

## 輸送船敵潜の魚雷を受け沈没する

昭和十九年二月二十一日、輸送船団は父島に向け、横浜を出港した。

物資を満載した輸送船団は六隻、二列縦隊に並び、その周囲を護衛艦三隻で守りながら、相模灘を出た。太平洋の黒潮は荒く、寒風は刃物のように冷たく膚に喰い込んでくる。

大島周辺は、敵潜が網の目をめぐらし、日本船団をじっと待ち伏せしている。とくに今年に入って数を増し、三隻位で集団を組み襲うという狼群作戦をとり、最も危険区域とされていた。

制海権は完全に敵に握られていた。船団は、敵潜に針路を覚られぬため大きくジグザグ運動を繰返し、南進した。

八丈島、青ヶ島、鳥島など伊豆諸島の近辺も敵潜の巢屈といわれ、船団は針路を西にとり、夜間は島から離れ、昼は島づたいに南進していく。やがて小笠原諸島に近づくと、日一日と暖かさが増す。

二十三日、夜明け間近の三時、草木も眠るときであった。漸やく小笠原群島の島影が見えていた。

「突然」静かな暗い海に「ごおーん」爆発音が起り、火柱が高く上り瞬時に輸送船一隻が波間に沈んだ。

「君島丸」である。敵潜の雷撃を受け爆発炎焼沈没したのだ。

敵潜の攻撃は、日没から深夜、そして払曉にかけ隠密裡に水上航走し、攻撃の上は速かに潜没退避していた。敵は水中測的

兵器の優速を利用し最近では極めて大胆になり、船団の真下に潜り、護衛艦の水中聴音機や水中探信機の死角内に入り、一挙に左右の船をねらい撃ちするようになった。

と、このとき望楼の見張員が大声で叫んだ。

「右、三〇度、雷跡、向ってきまーす」

水面すれすれにさざ波を立て、二本の魚雷が海防艦「福江」めがけて突っ走ってくる。

「面舵、いっぱい、急げー」艦長のするどい声、操舵員がすばやく転舵する。

「面舵、いっぱい」

五秒、十秒、艦は右に反転し、艦首は魚雷に向く。

シュンシュンとするどい金属性の音を発しながら、魚雷は艦の左舷を猛スピードで通過した。回避したのだ、命中すれば一発で轟沈だった。

「助かったア」乗組員の緊張がようやくほぐれた。

輸送船は、すばやく退避、護衛艦二隻が後を追う。

「爆雷戦用意」

海防艦「福江」に対潜掃蕩が命じられたのだ。

これからは、水測員の正念場だ。敵潜を発見するかどうかは、次の船に重大な損傷を与えることにもなる。水中に潜む敵潜を探知する水測兵器には、水中聴音機九三式二型と水中探信機三式二型が装備されていた。

水中聴音機は、艦内の音を止め使用しないと効果がなく、船

団の強行輸送の護衛時には殆ど使われない。エンジンを止める

と、護衛艦が先に敵潜の餌食にされるからだ。これに対し水中探信機は海防艦の生命とも云われ、とくに三式探信機を装備してからは、これをいかに使いこなすかにより対潜攻撃の効果が決まり、艦及び船団の運命にかかわることが大であった。

今、探信機室は、異状な雰囲気に含まれていた。

艦底の水中探信機から右方向に超音波を発信している。毎秒一、五〇〇米の速さで水中を伝わり、物体に当たって反響波が返ってくる。そこでブラウン管のオシログラフを見て返ってくる時間の $\frac{1}{2}$ が巨離であり、プレる角度が方向である。又、反響波の鋭さにより、岩石や鉄を見分けることができるし、更にレシパーをかぶり反響音により水上艦艇か識別するのである。捕捉は三

千米から五千米が限度であるが、水測員の錬度の高さによる、

「右、一〇度、三千、感度三」レシパーを付けていた鯨井水兵長が伝声管で叫んだ。ブラウン管の反響波が高低に動く、室内に緊張がみなぎる、勿論艦内の探信機室からは何も見えないが、艦橋から周囲を見ても、その方向に船も障害物もない。

「よしっ、捕捉探知」艦橋から伝声管で見張員の伝言が聞える。

「戦闘爆雷戦用意」艦長の命令が聞える。

「右、三〇度、二千、感度四」次第に目標に近づき、感度は高くなる。

僚船の仇打ちである。艦は全速力で目標めがけて直進した。

艦内の空気はピンと張りつめている。

「一番投射機、第一投射法、深度七〇、発射用意」

「右、三〇度 千五百 感度五」続々と報告が飛ぶ。

千、八百、七百

「用意よしー」

「探信機あげー」「よーい、テッ」

矢つぎばやに号令が飛ぶ。爆雷は軽快な投射機音に投射機もろとも空中高く投射された。みんな固唾をのんで見守っている。五秒、六秒、遠雷のような爆発音が伝わってくる。爆発のたびに稲妻が光り、水柱が上がった。

護衛艦は反覆攻撃するいとまもなく船団を追いかけるのが通常であった。敵中を突破する強行輸送作戦の場合、敵潜水艦に対する徹底した攻撃よりも、一隻でも多く、一時間でも早く目的地に送り届けるのが、海防艦の第一任務とされていたので、充分な制圧、掃蕩ができないまま船団を追うのが心残りであった。海に投げ出された乗組員が漂流しているかも知れぬのに……

船団と合同したのは夕方近くになっていた。

そしてその深夜、二十四日午前一時三〇分、今度は「番洋丸」が敵潜の雷撃を受け沈没した。

敵潜は海防艦が投下した爆雷の間隙を縫って日本船団の底に潜り、同航しながら退避していたのだ。何と大胆不敵な敵潜である。

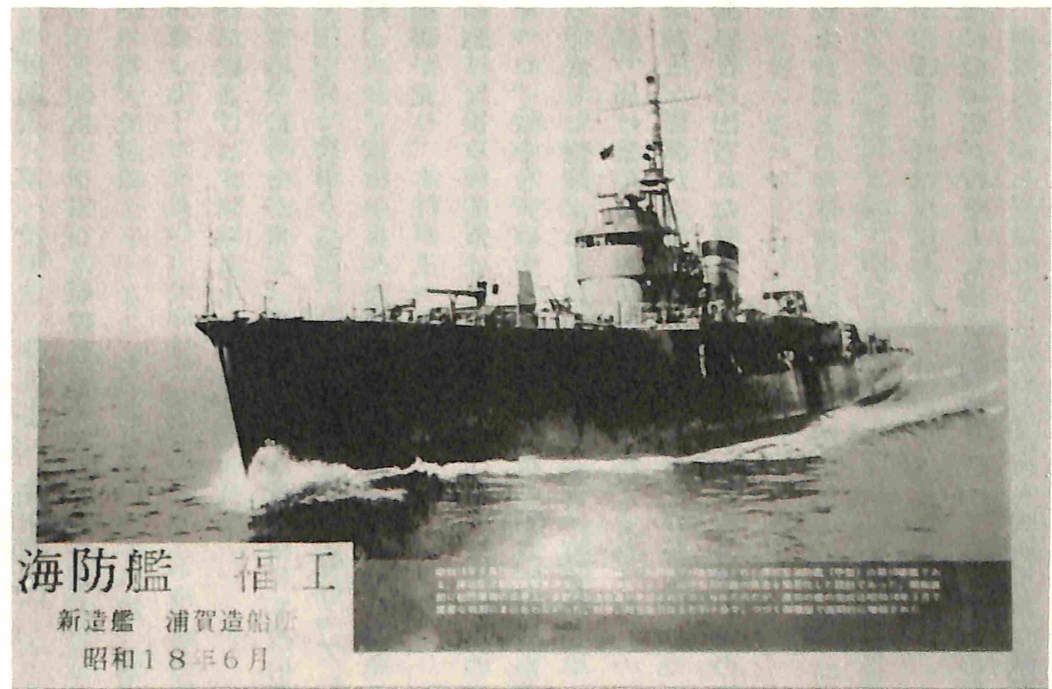
「福江」は現場に急行し探信掃蕩を再び行なったが、発見できなかった。父島寄港のため現場を離脱、船団の後を追い父島に向った。

### 海防艦「福江」はどのように活動したか(戦記)

海防艦「福江」乗組から退艦まで二年六ヶ月、船団護衛の任務遂行に日夜東奔西走した。毎日が生か死かかけた戦いの連続であった。

これら海上輸送戦にともなう損害は、想像に絶する莫大なものであったろう。

輸送船には、兵員、民間人、軍需物資、油その他一般物資が積まれ、船員も乗っていた。戦死、死亡された船員は六万余人、海防艦だけでも一万余人が戦死している。従って輸送船での戦死、死亡者は五〇万人を越えるだろうといわれる。戦死された多くの戦友に心から合掌を捧げるものである。



### 海防艦「福江」戦記

昭和18・6・28 浦賀船準において竣工・

横須賀防備隊に編入・以後直接護衛部隊として任務に就く。

7・9 船団護衛、神戸に向け横須賀発。

7・10 神子元島灯台二七〇度、十二湊

付近において敵潜水艦を発見、爆雷攻撃を行なう。効果不明。

7・11 神戸着。

7・15 第四艦隊第二海上護衛隊に編入。

7・17 横須賀着。

7・24 三七二四甲船団護衛、トラック

に向け横須賀発。

7・25 最上川丸敵潜望鏡発見、直ちに

爆雷攻撃を行なう。効果不明。

7・31 最上川丸敵潜の雷撃を受け、沈

没、直ちに攻撃掃蕩を行なう。

8・1 西江丸敵潜の雷撃を受け大破。

直ちに攻撃掃蕩を行なう。

8・2 トラック着。

8・4 船団護衛、トラック発。

8・6 護衛完了、トラックに帰投。

8・10 四八一〇船団護衛、横須賀に向

けトラック発。

8・18 横須賀着。

8・27 三八二七甲船団護衛、トラック

に向け横須賀発。

9・6 トラック着。

9・8 四九〇八船団護衛、横須賀に向

けトラック発。

9・19 横須賀着。

9・21 三九二一船団護衛、トラックに

向け横須賀発。

10・1 トラック着。

10・3 宝洋丸護衛、トラック発。

10・4 護衛完了、トラックに帰投。

10・8 四〇〇八船団護衛、横須賀に向

けトラック発。

10・19 横須賀着。

10・26 三一二六船団護衛、トラックに

向け横須賀発。

11・9 トラック着。

11・14 四一一四船団護衛、横須賀に向

けトラック発。

11・19 鵜戸丸、北江丸敵潜の雷撃を受

け沈没(概位北緯二二度二八分、東経

一四七度二二分)。直ちに攻撃掃蕩を

行なう。効果不明。

11・26 横須賀着。

11・28 三一二八船団護衛、トラックに

向け横須賀発。

11・29 八丈島より三〇九度、十二湊

付近において、乾隆丸敵潜の雷撃を受く。

直ちに攻撃掃蕩を行なう。効果不明。

11・30 乾隆丸炎焼、沈没。敵潜掃蕩を

打切り父島に向う。

12・2 父島寄港。

12・3 船団を護衛、トラックに向け父

島発。

12・12 トラック着。

12・22 四二二二船団護衛、横須賀に向

けトラック発。

昭和19・1・2 名古屋丸敵潜の雷撃を

受け沈没。付近探信掃蕩を行なう。効

果不明。

1・3 横須賀着。

1・7 三一〇七船団護衛、トラックに

向け横須賀発。

1・10 父島に寄港。

1・14 船団を護衛、トラックに向け父島発。

1・24 トラック着。

1・27 四一二七船団を護衛、サイパンに向けトラック発。

2・3 サイパン着。

2・5 アトランテック丸護衛、横須賀に向けサイパン発。

2・13 横須賀着。

2・21 船団護衛、父島に向け横浜発。

2・23 君島丸敵潜の雷撃を受け爆発炎焼。直ちに攻撃掃蕩を行なう。君島丸沈没。掃蕩を打切り船団に合同。

2・24 香洋丸敵潜の雷撃を受け沈没。現場に急行し、探信掃蕩を行なうも発見できず。父島寄港のため現場離脱。父島着。

2・27 三二二一船団護衛、サイパンに向け父島発。

3・3 サイパン着。

3・4 東山丸船団護衛、サイパン発。

3・5 護衛完了、サイパンに帰投。

3・6 水偵救難のためサイパン発。

3・7 サイパンに帰投。

3・9 四三〇九船団護衛、横須賀に向けサイパン発。

3・17 横須賀着。

3・23 敵潜掃蕩のため横須賀発。

3・25 横須賀に帰投。

4・1 東松四号船団護衛、パラオに向け横須賀発。

4・4 敵潜掃蕩、爆雷戦。敵潜水艦撃沈概ね確実。

4・13 パラオ着。

4・19 第一海上護衛隊に編入、東松四号船団護衛、基隆<sup>キヤン</sup>に向けパラオ発。

4・28 基隆着。

5・2 タモ一八船団護衛、佐世保に向け基隆発。

5・8 佐世保着。

5・18 門司に回航のため佐世保発。

5・19 門司着。

5・20 テ〇七船団及びモタ二〇船団護衛、門司発。

5・25 基隆着。

6・1 テ〇七船団護衛、マニラに向け基隆発。

6・6 マニラ着。

6・9 マニラ七、マサ〇六船団護衛、海南島榆林に向けマニラ発。

6・19 八所着。

6・21 江田島丸護衛、三垂に向け八所発。

6・22 三垂着。

6・24 ユタ〇七船団護衛、佐世保に向け三垂発。

7・1 基隆に寄港。

7・4 船団を護衛し、佐世保に向け基隆発。

7・9 佐世保着。大湊警備府海上護衛隊に編入さる。

7・17 大湊に回航のため、佐世保発。

7・19 大湊着。

7・20 稚内回航のため、大湊発。

7・21 稚内着。

7・29 大泊回航のため稚内発。大泊着。

8・1 柏柴丸救難のため、稚内に向け

大泊発。

8・10 キラ〇〇三船団護衛、オハに向け稚内発。

8・15 敷香寄港。

8・16 船団を護衛し、稚内に向け敷香発。

8・22 稚内着。

8・25 大泊に回航のため稚内発。

8・31 稚内に回航のため大泊発。稚内着。小樽に回航のため稚内発。

9・1 小樽着。大湊に回航のため小樽発。

9・2 大湊着。

9・8 小樽に回航のため大湊発。

9・9 小樽着。稚内回航のため小樽発。

9・10 稚内着。

9・12 波風護衛、小樽に向け稚内発。

9・13 小樽着。

9・19 キ八〇三船団護衛、稚内に向け小樽発。

9・26 稚内着。

9・27 キ四〇五船団護衛、占守島片岡湾に向け稚内発。

10・4 片岡湾着。ヲ四〇四船団護衛、稚内に向け片岡湾発。

10・9 稚内着。

10・12 小樽に回航のため稚内発。

10・13 小樽着。

10・14 キ四〇三船団護衛、片岡湾に向け小樽発。

10・18 片岡湾着。

10・23 ヲ三〇三船団護衛、小樽に向け片岡湾発。

10・30 小樽着。

11・10 キ五〇二船団護衛、片岡湾に向け小樽発。

11・21 片岡湾着。

11・29 オ九〇四船団護衛、小樽に向け片岡湾発。

12・5 小樽着。

12・6 大湊に回航のため小樽発。

12・7 大湊着。

(この間不詳)

昭和20・1~2 佐世保に回航のため大湊発、佐世保に向かう。震洋艇搭載船団を護衛し、石垣に向け佐世保発。那

覇に寄港。

2・28 船団を護衛し石垣に向け那覇発。

3・1 石垣着。石垣泊地に停泊中、敵機動部隊艦載機の攻撃を受け、応戦対空戦斗。F6F三機撃墜。戦斗中右舷に爆撃を受け中破。戦死者二十三名、戦傷者三十七名を生ず。僚艦：敷設艇怒和島、十五号駆潜艇 北方に避退、船団を護衛しつつ、佐世保に向かう。

3・4 佐世保に帰投。

4・2 大湊に回航のため佐世保発。

4・5 大湊着。

4・10 一〇四戦隊(海防艦福江、國後、八丈、笠戸、占守、擇捉)に編入され、以後津軽、宗谷海峡方面の防備及び船舶の護衛に当る。

4・13 函館に回航のため大湊発。

4・14 函館着。対潜掃蕩のため函館発。

4・19 函館に帰投。大湊に回航のため函館発。

4・20 大湊着。

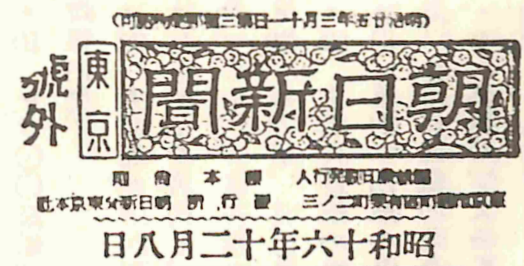
5・6 小樽に回航のため大湊発。同日小樽着。

- 5・7 船団護衛のため片岡湾に向け小樽発。
- 5・14 片岡湾着。
- 5・19 船団護衛のため小樽に向け片岡湾発。
- 5・25 小樽着。
- (この間不詳)
- 8・15 大湊にて終戦。
- 10・5 除籍。
- 10・12、21・12・16 特別輸送艦となり、パラオ、ガム、トラック、テナアン、沖繩、基隆、徳ノ島、上海、花蓮港、サイゴン、バンコック、コロ島方面よりの復員輸送に従事。
- 昭和22・7・16 賠償艦として、シンガポールに於て、英国に

引渡される。

海防艦「福江」のあらまし

基準排水量	八七〇ト	備砲	一二ポ	単装	三
公試排水量	一〇三〇ト	機銃	二五ミ	三連装	五
水線長	七六・二〇ミ	機銃	二五ミ	単装	四
最大巾	九・一〇ミ	爆雷			三六コ
馬力	四、二〇〇馬力(ゼイル)	水測兵装	九三式	聴音機	
速力	一九・七ノット	九三式探信機	(後に三式二型)		



# 今曉西太平洋において

## 皇軍、米英軍と戦闘開始

### 大本營陸海軍部より發表

【大本營陸海軍部發表】(十二月八日午前六時)帝國陸海軍は今八日未明西太平洋において米英軍と戦闘状態に入れり

(提供：朝日新聞)

# 八幡さまの風音

山中 長三郎

昭和二十年八月十五日の敗戦の日まで我が部隊は本土決戦の大号令のもとに厚木飛行場防備の任務に当たっていました。日増に回数が多くなる敵戦闘機の来襲をさけながら陣地構築あり機関砲、観測の訓練にと暇ありません。農作物の収穫が済むと陣地周囲の田圃に水を入れ田圃は敵戦車の通れぬようにして、我が陣地に引き寄せて攻撃する作戦だという「古兵の話より」

八月三十日、米軍の連合指令長官マッカーサー元帥、厚木飛行場に来降される。数日後、我が部隊解散する。二等兵の私は背囊に毛布三枚、軍服一着を入れて背負い日用品を詰め込んだ雑囊を肩に掛け上野駅より夜行列車にのり、ふる里に帰りました。

敗戦のショックに仕事手がつかない日が続く。ある日夜に時期外れの盆踊りの歌が聞えてくる。歌に誘われて前町の踊り場に行く踊りはまさにたけなわであり、私も踊りの輪に加わったが気が晴れない。暫くして家に帰ったが眠れそうになく月夜の散歩と思つて白ズボン、白肌着に下駄履き、手に木刀を提げて八幡さまの前に立つと境内は暗く、朱色の一番鳥居に月が映え、周囲は静である。

参道の舗装を進むとカラカラと下駄の音が響き、最奥の鳥居まで行くと、右手の間に白い物が微かに動きだす。怖いもの知らずの若者時代である、木刀を持ち変え近くに迫ると又、動きだした。

木刀を構えると又、動く、よくよく視ると白い服装の女と男が寄り添って少し高い所に腰を掛けていたのである。

男は黒っぽい上着のためか見えなかった。男女と判明す、速刻に引返えした。その時うしろより、会話が聞こえてくる。

女「あの人は誰れ！」

男「サー誰れだろうな！」

と一言。境内の中央だけは、月明りが差し込んでポツンと明るい。拝殿の階段を登り手を合せたがお祈りの言葉は浮ばない。階段を降りて二振り三振り木刀を素振りして境内を去り八幡宮橋に來ると、あの二人は何にを祈りしたのかと、八幡さまの森を振り返って見ると月は一面に森を照している。当時小田川上流にダムはなく、普段は水量も適度に流れ川底は砂利が至る所に敷き詰って水が浄化され澄みきってあった。

神への信仰深い人は橋の下の水で身体を浄め八幡さまに願を

かけたといわれ、岩木山参詣に行かれる人も川にしめ縄をめぐらし、七日間八幡さまにこもり魚や肉はたべず水垢離をとり近村の氏神参りや親類まわりをする。最終日は嘉瀬の村内を白装束をつけ、ヒノキをかんなで薄紙のテープのようにけずったもの、又、五色の紙テープで、竿の上は短く下は長く二ヶ所に束ねて三メートル六メートルもある大御幣をつくり、若者、壮年の体力に応じて持参する。

初詣は赤、青、二回目から白、五回目銀、七回目から金紙。奉納と書かれた小御幣を首筋にさし「この小御幣だけは岩木山参詣に持って行く」大御幣の竿元を腹巻に挿し込んで高く揚げて三十人ほどの若者が、笛、太鼓に登山ばやしで掛け声勇ましく練り歩く。

村人の出されたお酒に酔っぱらって疲れてくると、大御幣を軒先に立て掛け一休みして見はりを怠るとタチマチテープは子供等に抜きとられてしまう。

秋の訪れを告げる勇壮な風物であった。八幡宮橋の北側に、馬浴場に降りて行く斜面路があり、朝晩の馬の運動にはかならず馬浴場に入れ水を吞ませ、少し走らせて足を洗う。

馬仕事の済んだあとと夏にはよく馬の体を洗い流す。

橋の下の深みで馬を泳がせることもあり、深みには色々雑魚が泳ぎ釣り人もよく見られました。

農閉期には人夫や馬の荷車が多く出て馬浴場の砂利を運搬して野良道を修理されたのです。此の馬浴場は古町、後町、畑中、

冷水、小栗崎の五ヶ所にあった。畑中の馬浴場は近い町内の奥さん方の洗濯場でもある。冬は畑中の川辺りの家々では川面に張った氷りに穴を二ツあけ一つは洗物、一つは呑み水に用いましたが今では思い出に残るだけとなりました。

### 私の少年期の八幡さま

絵馬奉納に「父」に連れられて奥の殿前に行くのと両側の薄暗い所に絵馬は二重、三重に掛けられてある、その中より白馬の絵馬を探し当て、絵馬を手にながらアヤが言うには、此の絵馬は祖父が駄賃つけ馬車で物運びをされた時に奉納されたそうであり、白馬絵馬と自分の黒馬の絵馬と掛け並べしじみと眺めていました。

八幡さまは正月、神楽、虫祭り、宵宮、等の祭りがあり賑う森であり、子供の遊びの森でもあった。町内での遊びはたまたま大人達に叱られるが八幡さま境内では誰も叱る者が居ない。子供の自由に遊べる天国だ。

子供等は二手に分れ、兵隊ゴコ「遊び」その内に小鳥の巣を発見されると兵隊ゴコは、一時休戦となる。

巣の掛かった古木によじ登り卵を取ると、小鳥捕えに夢中になる。

巣はたいてい、古木のさうとう高い枝に掛けられている。

登る時は、夢中で登るが、降りる時には怖くて、べそをかく。仲間の手前に泣くに泣けないのである。

境内の藪中にはヘビ、ガマ蛙、カブト虫、昆虫の種類も多く棲息している。よその昆虫より大きく、大きいカブト虫を捕らえては自慢の一つになる。藪には、イチゴ、アケビ、ゴンパ、オオバナエンソウ、マイヅルソウ、トリカブト、ドクウツギ、珍味もあれば、猛毒ありである。イチゴやコンパの実を採っては食べて走り廻る。晩になるとウルシに弱い私は、顔やチンチンが腫れ、一晩中痒みに悩まされる癒えるまで三日はかかる。母に叱られ父はニヤニヤ笑って薬を塗ってくれた。

境内にはトチ、イタヤカエデ五枚葉、ケヤキ等の巨木におおわれ葉の茂る季には昼も薄暗い境内であった。トチの実は凶年の食用にと二重俵にし屋根裏に置くと十年は保存できたという。敗戦前後他村の人が毎年拾いに来られた。巨木は戦争末期に造船所行にと切られ敗戦後は神への敬薄、八幡さまの経済もあり巨木が切られ疎となった巨木も復。台風に倒される、田打桜、藤の花、カッコウ、フクロ、鶯等の鳥や樹は往来の人々に季節の訪れを告げる。須崎正敏先輩が金木営林署内担当区に勤務している頃、営林署の参考になる事項募集に投書された八幡さま境内の生態の書かれたのを見て、署長自ら八幡さまを訪れ近在の里山に有うするものは何んでもある平坦地には稀有な存在であると讃嘆されたそであります。

### 青少年期の八幡さま

「第十一集かたりべの沢田薫氏の日記、八月十五日（日曜日）」

夜七時より愛郷会の例会、嘉瀬八幡宮にて、出席者十二名（村はいたる所教室なり）の出席者十二名に私も居たと思う、例会の意見発表は必然の定りであった。月二度ある例会での意見発表の順番が来ると一番嫌いだである。

順番が近づくとき心はただ焦るばかりである。最初の頃に意見発表に戸惑うと、木立会長は山中、朝何時に起て何仕事してきた。ハイ、私は、六時に起き馬草刈ってきました。もう一度言ってみると会長が言う。朝六時に起きて馬草を刈ってきました。これが最初の私の、意見発表である。境内の暗い夜の例会の時である。

愛郷会員の吉崎春雄、浜田常男、吉崎兼雄、沢田国春等と共に「危険のため長靴を履く」八幡さま前の橋の欄干上より川の深みに飛び込んだり、境内で銃剣道の稽古をして気合を夜の境内に響かせる、帰りには横一列に並び大東亜戦争必勝を神にお祈りする。

私の兵役は短く、国内勤務だけであります。昭和二十年三月十日は生涯忘れる事のない日であります。三月九日夜から十日未明にかけて東京大空襲であり、この日アチズ、E、ルメイ司令官によって行なわれた。

東京大空襲は、約三〇〇機のB29により、二時間半もの長きにわたってつづけられた。

しかもルメイはあらかじめ、長時間燃焼するナパーム焼夷弾

を町の周囲に落し、炎の壁によって包囲される状態にして、逃げまとう人々の頭上にさらに爆弾を落とすという念の入れ方であった。

このとき落とされた焼夷弾は一七八五トンにおよぶという。この東京大空襲により死者推定で一〇万人、負傷者四万人におよび、一〇〇万人以上の人が家を失っている。

東京全体の約四割が焦土と化したというのだからすさまじい。(小和田哲男著から)

空襲の夜私は、大井駅前にある兵舎におりました。小学校半分を使用していた。上官の命令により外に出た時は、タンカイ燈(探照灯)、「灯台のような細長い線の明り」の光りが遠く離れた数カ所の其台より上空のB 29を探し求めて施回する。

タンカイ燈の光りに入ったB 29の姿は光って見えます。又操縦士の目も眩み光りより逃れられず。最後は墜落するといわれる(古兵殿の話)。炎は上空に舞い上る、兵舎にも火の粉が飛来する。命令なくして勝手に行動してはならぬ、上官の厳命である。初年兵の私等はただ見ているだけである。

古兵殿等は何処にか走り巡っている。翌朝の運動は普段のコースを走らず、廢墟と化した街に行く、崩壊された家々がまだ燻っていた。焼野原が何処までも続いて国民義勇隊、消防隊が焼死体を一箇所に集めている、半焼けした服装で歩いている人、足を引ずる人、佇じみながら苦痛にたえている人様々の容態は昨夜の爆撃の地獄図を物語っている。班長殿も初年兵も一ト言の

声もなく早々に兵舎にかえりました。

当時B 29はサイパン島より飛び立ち富士山の上空に来ると目的の爆撃地に向うのだと古兵殿が知らせてくれた。

又サイパン島でB 29の空爆の準備中であること、何時頃日本上空に飛来することも事前に初年兵にも知らせてくれるが物資乏しく、制空権を敵国に掌握された日本は手も足もでなかったのだと思う。

夕刻に部隊長が見えて、昨夜のB 29により川崎市の中隊は防空壕に爆弾を受け班長以下全員戦死し「その中に三月三日入隊され一週間前まで同じ嘉瀬の若者である飯塚秀雄、沢田国平の二人も含んでいる」

我が軍の奮闘によりB 29を五〇機、撃墜したといわれ、我が中隊に誉言がありました。一九九六年発行の高射師団戦史には二十年三月十日の撃破五〇機の戦果とある、十五センチ高射砲二門久我山(現東京杉並区)陣地に配備、これは大威力を発揮し、以後B 29は同地上空を避けたという。

敗戦日の夜も私達の頭上を次々と沖繩戦地に飛び行く若い日本航空隊員の飛行機の響きを遠く、微かな音になるまで聞きながら眠れぬ夜でありました。

### 敗戦期までの八幡さま

八幡さまの来暦を詳しく知りたい方は前発行の第一集嘉瀬八幡宮木下清一記、第五集表紙絵解説山中正津、第六集嘉瀬八幡

川辺に飛び交うホタルと遊び。

ホ、ホ、ホータル来い

こっちのミーズはあーまいぞ

あっちのミーズはにーがいぞ

ホ、ホ、ホータル来い

と歌わせた。

平成九年七月

## 津軽弁 村の笑い話(その四)

### 「焼き餅」

むらの源太どこの娘「サド」は十七になるが、なんぼか足りなくて、寝小便もらすのだ。

ある日「餅、食って寝れば小便さ起きねエ」という話を聞いて、餅を食って寝ても小便に起きねだば、下のモノさ押当てて寝れば、もつと効くと思ひ、焼いた餅をそのまま、アソコが赤くムックラど腫れで、熱さをじつと我慢していたら、これが本当の「焼き餅」だびよんと、村人の声。

(村)

宮寄進物石造明細、調査者沢田薫、須崎正敏、秋元惣之進、第七集嘉瀬八幡宮と献納物考秋元惣之進等のかたりべを参考にしてください。

拜殿の外側の板柱には、日清、日露戦、シベリア出兵、支那事変、大東亜戦争等に出征された者、又何かの理由により郷里を離れて行く者達色々記されてありました。

風化と改築により判読のできぬものもありましたが、夏の涼みに拜殿の縁台に上りセミの声を聞きながら記念の書き印しを探したこともある。

明治生れの山中利助氏もシベリア出兵の時に記したと申されています。嘉瀬の有名人、山中利一氏の記した漢詩は私の浅学では判読できませんでした。

齊藤由七、山中新一武運長久、齊藤善一皇国満歳、平川信等も記されしも「他の人のもあり」外地で戦死され、復び、ふるさとかえらざる人々であります。

昭和五十五年に拜殿の火災により、外側の板柱に記した、人々の記録を失う。  
流転の兆す。

八幡さま前に京都の舞妓が渡ってきそうな朱色の橋が架けられ、小田川の土堤も桜並木の公園となった。  
行く行くは満開の花の下に自然の道が出来、小道の名称はかたりべと命名され、京都の哲学の道のごとき、某県の文学の道のごとくなられることと、願わくはかたりべの道で子供等に、